

埋文こうち

第25号

平成24年3月31日

高知県教育委員会



長大な堀に囲まれた中世の城館

— 香宗我部氏こうそがべに関わる中世の大規模な館跡の発見 —

ひがしのどい東野土居遺跡では東西約500mにわたって中世の屋敷群が検出されており、その西端で大規模なやかた館跡を確認しました。館跡は幅約5m、深さ約2mの長大な二重の堀に囲まれており、一辺は80mに達します。館跡からは室町時代を中心とする土器類が出土し、当時の生活の様子を知ることができます。調査対象地の北東方向にはこの地域で活躍した香宗我部氏の居城であるこうそう香宗城跡が存在し、その関連が示唆されるとともに同時代において細川氏の守護所にあたる田村城館との関係も注目されます。

(県埋蔵文化財センター 山崎孝盛)

1 香南市 東野土居遺跡

— 弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡 —

東野土居遺跡は香宗川^{こうそう}の右岸に広がる野市台地上に立地し、香南市野市町東野から土居にかけて所在する遺跡です。本遺跡は平成21年度から発掘調査を実施しており、3年目をむかえます。

調査対象地西端に所在する調査区では、掘立柱建物跡と区画溝からなる江戸時代後期から続く集落跡が確認されました。溝で区画された区域内には掘立柱建物跡、ハンダや粘土固めの土坑、一部ハンダ塗^{ため}の地下室、溜井戸、瓦質土管の暗渠^{あんきよ}など多様な遺構が検出されました。遺物では大量の瓦、国内産陶磁器や砥石、キセル、銅銭など当時の身近な生活用品が出土しています。遺構で注目されるのは区画溝に連結した溜井戸で、底に厚い粘土層があり溝から水を流し溜めていたことがうかがえます。これは江戸時代後期以降のものと考えられ、野中兼山による野市台地の用水開発に伴う水利施設の可能性もあります。さらに、トイレや肥溜^{こえだめ}



溝跡に一括廃棄された瓦と陶磁器



屋敷跡の完掘状態

であった土坑には砥石、食器一式、銅銭がみられ、溝跡には縁を打ち欠いた酒杯が置かれていました。これらは使用しなくなったときに行った祀^{まつ}りの跡と考えられます。

調査対象地中央部の調査区では弥生時代から江戸時代にいたるまでの遺構と遺物を確認することができました。弥生時代終末から古墳時代初頭と古墳時代後期の概ね2時期の竪穴建物跡^{たてあな}が8棟検出されました。県道30号香北赤岡線から東側の調査区では同時期の竪穴建物跡を多数確認しており、今回の竪穴建物跡の検出により県道より西側にも集落が営まれていたことを確認することができました。

奈良・平安時代では掘立柱建物跡や土坑、鎌倉・室町時代では掘立柱建物

跡や区画溝、井戸跡などの遺構を数多く検出しており、鎌倉・室町時代には溝で区画された屋敷が広がっていたものと考えられます。これら屋敷跡が確認された調査区の西端では、幅約5m、深さ約1.5~2.0mの堀跡2条とともにその内側には掘立柱建物跡や区画溝、柵列や井戸跡などが確認されています。外堀の区画は一辺が約80mに達しており、並行する内堀との間に土塁を設けた館跡であったものと考えられます。さらに本遺跡の北東部には鎌倉・室町時代においてこの地域で活躍した香宗我部氏の居城である香宗城跡が存在しており、これらの遺構は香宗我部氏に関係したものであった可能性が考えられます。

調査対象地東端に所在する調査区では、昨年度と同様弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物が多数確認されています。本年度は弥生時代終末から古墳時代初頭と古墳時代後期の^{たてあなたてもものあと}竪穴建物跡を新たに12棟検出し、これまでに確認した竪穴建物跡は100棟以上に上ります。また、掘方が隅丸方形を呈し一辺約1mの柱穴で構成された奈良・平安時代と考えられる3間×3間の総柱掘立柱建物跡も検出されています。

本遺跡で確認された同時期の掘立柱建物跡は計12棟となり、当時の役所か寺院に関連する施設があった可能性が考えられます。

平成21年度から始まった本遺跡の発掘調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭と古墳時代後期の集落跡や奈良・平安時代の掘立柱建物群、室町時代の屋敷群、江戸時代の集落跡などが確認され、それらからは数多くの遺構が検出されるとともに膨大な量の遺物が出土されており、今後は来年度から始まる本格的な整理作業において東野土居遺跡の全体像が明らかになるとみられます。



瓦質土器の出土状態



土器棺の出土状態

(県埋蔵文化財センター 筒井三菜、菊池直樹、下村 裕)

2 香南市 庭ヶ淵遺跡

—縄文時代晩期の集落跡か—

庭ヶ淵遺跡は香南市香我美町上分に所在し、山南川（香宗川支流）右岸の標高約30m前後を測る河成段丘に立地しています。市道堀ノ内南北線建設に伴う試掘確認調査により、平成23年に新たに発見された遺跡です。調査の結果、縄文時代晩期後半（約3,200年前）の刻目突帯文土器約350点をはじめとする縄文土器片約数千点が出土しました。遺物には、口縁部に刺突孔を連続的に施した孔列文土器数点が含まれていました。この土器は朝鮮半島の影響を受けていると考えられ、県内では居徳遺跡群（土佐市）など数例があるのみで、香長平野周辺では初めての出土となります。この他に、北陸地方の所産と考えられる土器が出土するなど、当時の人々の他地域との交流が想像されます。遺跡下段からは小穴（柱穴）を伴う浅い凹状を呈した住居状遺構を検出しました。被熱したとみられる石や、遺構上面の集石から、叩石や磨製石斧（加工斧）などが出土しています。上段からは火処とみられる焼土痕や、配石を伴うと考えられる土坑、水汲み遺構の可能性を残す掘り込み等を検出しました。包含層からは石鏃や多量のサヌカイトの剥片が出土するなど、生活の痕跡をうかがわせる遺構・遺物が見つかりました。また検出面下層からはアカホヤ火山灰（約7,300年前）の堆積状況が確認され、地質学的にも貴重な成果が得られました。今回の調査では縄文土器の他に、弥生時代前期前半（約2,600年前）の遠賀川式土器（西見当Ⅰ・Ⅱ式）が出土しています。調査対象地外の尾根上などに集落が展開していた可能性が考えられ、縄文から弥生時代への移行期の遺跡として注目されています。また須恵器や土師器など古代から中世にかけての遺物も数百点出土しており、周辺に当該期の遺跡が所在している可能性を示唆しています。（香南市教育委員会 宮地啓介）



作業風景



孔列文土器

3 南国市 田村北遺跡

—ひろがる田村遺跡—

田村北遺跡は、南国市田村に所在します。高知南国道路建設に伴い昨年度から発掘調査を行っています。調査により、縄文時代、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が見つかりました。

弥生時代のものでは、中期末～後期初頭の竪穴建物跡、土坑、ピット、流路跡が見つかり、竪穴建物跡は現在までに5棟見つかりました。大きさは直径約4mの円形のものや一辺約4mの隅丸方形のもので、やや小型です。土坑は、隅丸正方形、隅丸長方形、溝状を呈するものがあります。隅丸正方形のものは、一辺約2mの規模のものが、隅丸長方形のものは、幅約1m、長さ約1.5mの規模のものが多く、形と大きさには相関関係が認められます。これらの土坑は貯蔵穴と考えられ、深いものでは約70cmありました。

周辺の地形や試掘確認調査の結果から、今回の調査地点は「弥生田村ムラ」の北東部に該当します。弥生時代に限って言えば、今回の調査では中期末～後期初頭のもののみです。この時期は「田村ムラ」が最盛期を迎え、急激に人口が増加し、それに伴い居住域の拡大が行われます。当調査区はそのような背景で新たに居住域として開発されたと考えられます。

古代では、掘立柱建物跡が1棟見つかりました。柱穴は一辺約80cmの隅丸方形を呈し、棟方向は香長条理の方向と一致していますので、官衙等に関連する建物跡と考えられます。田村遺跡群でも、同様の建物跡が見つかりましたので、周辺には官衙的な建物跡が点在していたようです。

(県埋蔵文化財センター 久家隆芳)



遺構を完掘した様子



土坑の中から土器が見つかった様子

4 南国市 西野々遺跡

—田村遺跡から移住した人々のムラ—

西野々^{にしなの}遺跡は南国市^{おおそね}大埴の香長中学校とその北側の東西約800m、南北約200mの範囲に広がっています。これまでに弥生時代～中世にわたる多数の遺構・遺物が確認されており、今回は香長中学校武道館建設に伴って748㎡を調査しました。

今回の調査では、主に弥生時代後期終末の竪穴住居が14棟確認されました。その中でも、調査区南東隅で検出した住居は直径が推定11.5mの円形で、面積にすると103㎡と高知県内で確認されている竪穴住居では最大の大きさです。この住居は河原石の層を30cm以上も掘り込んでおり、大変な労働力を投下して造られたようです。柱穴も人が入れるほど大きく、柱穴よりも外側は床面が10cmほど高くなった「ベッド状遺構」と呼ばれる施設もつくられているなど、他の住居には見られない特徴を有しています。また、住居が埋まった土の中には、大量の河原石が集まっている部分があり、その河原石の上には、完形の土器がいくつも置かれていました。住居が使われなくなり、取り壊して埋めた際に石を投げ込み、感謝の念を込めてお供えをしていたのでしょうか。

遺跡内には、大阪の河内平野で作られた庄内式土器や、岡山のほうで作られた吉備系土器など、各地の土器も運ばれてきています。

こうした大型住居が出現したり、各地の土器が持ち込まれたりする現象は、古墳時代に入る直前の時期の拠点集落で見られることがあります。この時期は高知最大の弥生集落である田村遺跡のムラが衰退して集落が営まれなくなった時期でもあり、土佐の古墳時代の始まりを迎える頃の社会情勢の一端を反映している可能性があります。

(南国市教育委員会 油利 崇)



5 南国市 明見彦山1号墳

明見彦山1号墳は、南国市明見にある古墳時代後期～終末期の古墳です。古墳の墳丘はおそらく円墳で直径14mと考えられています。古墳の中央には横穴式石室があります。石室の大きさは全長8.96m・玄室（棺や副葬品を置く部屋）長5.64m・玄室幅2.16m・羨道（玄室に続く通路）長3.32m・羨道幅1.20mです。この規模は高知県では大型に属し、このことから土佐三大古墳に数えられていました。しかし、調査が行われたことがなかったので、これまでその内容が不明でした。そこで、2年計画で発掘調査を行って内容を明らかにし、高知県の古墳時代を描く資料にしようと考えました。調査は2011年2月22日～3月24日に実施しました。

調査は、玄室の奥からみて左半分を発掘しました。すべてを発掘するのは右側の壁が傾いていたので危ないと考えたからです。調査の結果、古墳は盗掘によって大きな被害を受けていることがわかりましたが、それでも重要な発見がいくつもありました。まず、石室は想像以上に土が流れ込んでいて、現状から約70cm下にほんらいの床面があることがわかりました。その結果、玄室の高さは2.8mあることが判明しました。この高さは、高知県最大の古墳である南国市小蓮古墳の石室に匹敵する高さです。明見彦山1号墳被葬者は、高知平野においてかなり有力な人物であったことがこれでわかります。

また副葬品が数多く出土しています。金属製品は盗掘によって持ち出されたのか、それほど多くはありませんでしたが、8個の須恵器がほぼ完形で出土しました（写真 土器出土状況）。この須恵器の形はTK209型式と言って、6世紀末から7世紀初めの特徴を持ちます。古墳の築造時期をほぼ特定することができました。さらに、玉類が数多く出土したこともこの古墳の特徴と言えましょう。水晶製勾玉・ガラス製管玉・ガラス製小玉が計60点以上出土しています。高知県の中でも最多を誇ります。ガラス小玉は、黄色・青色・緑色とカラフルです。これら以外に、耳環というイヤリングも出土しています。当時のアクセサリやそれを用いた祭りを復元するのに大いに役立つと考えられます。（高知大学 清家 章）



土器出土状況



玄室奥壁

6 南国市 ^{おこう}岡豊城跡 — 岡豊城跡最大の曲輪^{くるわ}の調査 —

南国市岡豊町にある岡豊城跡は、戦国時代に土佐を統一し、四国全土へ勢力を広げていった長宗我部氏の居城として知られています。

伝家老屋敷曲輪は、国分川から詰へと登るルートの中間地点に位置し、長宗我部氏もしくは有力家臣の居館が存在した可能性が以前から指摘されていました。この伝家老屋敷曲輪が岡豊城内でどういった役割をもっていたかを明らかにするために南国市教育委員会では平成22年度から発掘調査を行っています。

この曲輪は、尾根を大きく削り、その削った土で谷を埋めることで1,650㎡と岡豊城内でも随一の広さの平坦面を作り出しています。

調査は部分的に7ヶ所の地点で遺構の確認を行いました。切岸という尾根を崖状に切って登りにくくした場所の真下では、170基以上の柱穴跡が密集して確認できました。柱穴群は南北16.8m、東西13.5m以上の範囲に広がっており、この場所を選んで短い期間に何度も建物を建て替えていたことがうかがえます。

他の地点でも、柱穴を中心に道路状遺構や溝などの遺構が確認され、空間を計画的に利用していることがうかがえます。

今回の調査では、多数の遺物が出土しており、交易によって手に入れた中国製の磁器や備前焼、瀬戸焼なども出ています。また、これらの遺物の時期は16世紀後半に集中しており、長宗我部元親が活躍した時代にこの曲輪もよく利用されていたようです。今後、建物の構造や配置、さらには曲輪全体の使われ方を明らかにするために継続して調査を行い、この曲輪の性格を解明していく予定です。

(南国市教育委員会 油利 崇)



伝家老屋敷曲輪全景



調査の様子

7 高知市 ひろめやしきあと 弘人屋敷跡

—高知城下の家老屋敷跡—

江戸時代、高知城の周りには「郭中」^{かくちゆう}として周囲と区分された上士^{じょうし}らの居住域が広がっていました。とりわけ城に近い場所には家老など位の高い人々の屋敷が集中していました。高知城の表玄関である追手門^{おうてもん}からは当時のメインストリートである追手筋^{おうてすじ}が延びており、現在では日曜市などが開催されていますが、この追手筋に面した今日のひろめ市場をふくむ区画には、土佐藩家老「深尾弘人蕃頭」^{ふかおひろめしげあき}の屋敷があったことが知られています。これに因み、この一画に存在する遺跡は「弘人屋敷跡」として周知されています。今冬から弘人屋敷跡のうち、もっとも追手門に近い区域の発掘調査を始めました。

弘人屋敷跡の発掘調査は県立の新資料館（仮称）建設に伴うものです。およそ90m×50mの範囲を対象としており、現在は調査区を南北に分けたうちの南側を調査しています。江戸時代の家老屋敷の内容とともに、これを遡る中世以前の生活痕跡にも注意していますが、現在までに確認できたのは、明治時代以降の建物で遺跡の相当部分が削平されたこと、南側は地形が低く河川に起源する砂礫層や水浸けの堆積物が見られること、陶器や古銭など江戸時代の遺物の存在、および中世の土器片や須恵器片とみられる遺物の存在などです。このうち地形の変化に関連するところでは、平地と低地の境界部分に沿ってびっしりと打ち込まれた杭列を確認しました。また砂礫層では用水路とも考えられる丸太列を確認しました。これらの正確な時期については、今後、地層と出土遺物の関係を検討した上で判断していきますが、いずれにせよ遺跡内の南側部分は居住には不向きであったようです。

（県埋蔵文化財センター 宮里 修）



地形の境界に沿って杭列が延びる



丸太を並べた用水路か

8 みたらい 御手洗遺跡

— 弥生時代の集落跡と中世の屋敷跡を発見 —

高知市西部の^{こうだ}神田地区に所在する御手洗遺跡は、鏡川の支流である神田川の南にあり、^{わしお}鷺尾連峰の裾に広がる丘陵部先端の微高地上に立地しています。平成23年度の発掘調査では、弥生時代の集落跡と中世の屋敷跡が確認されました。

弥生時代の遺跡は、周辺では鴨田小学校敷地内で発見された鴨部遺跡などがありましたが、神田地区での遺構の確認は今回が初めてとなります。調査では、弥生時代中期から後期にかけての土坑、溝、ピット、竪穴状の性格不明遺構などが検出されました。中でも、溝状の形をした弥生時代中期の土坑からは、壺や^{かめ}甕などの土器、石包丁などの遺物が大量に出土しました。

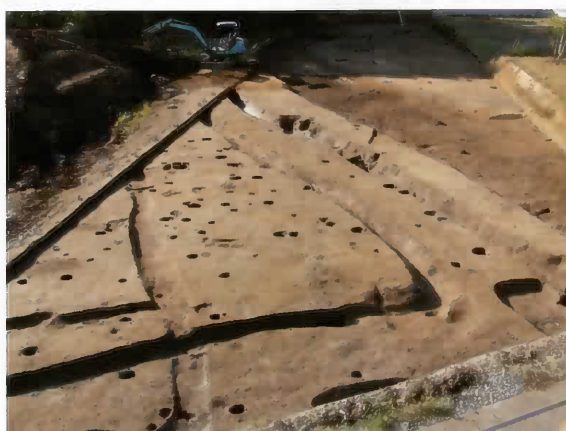
中世では、鎌倉時代から室町時代にかけての屋敷跡を確認しました。屋敷地は境界施設である溝によって囲まれており、調査ではその北東隅の部分が検出されています。また、数棟の掘立柱建物も存在していたとみられ、柱痕をともなう柱穴が多く検出されました。中世の遺物としては、地元産の土器の他、白磁、青磁、青白磁などの中国よりもたらされた陶磁器、和泉地域（現在の大阪府）の^{がき}瓦器碗や皿、^{とこなめ}常滑焼の甕、備前焼の播鉢などが出土しています。

御手洗遺跡の近隣には、ほぼ同時期頃の屋敷跡が確認された神田ムク入道遺跡があり、中世の神田地区では有力者の屋敷が各所に存在していたことがうかがわれます。

（高知市教育委員会 浜田恵子）



弥生時代中期の溝状土坑と遺物



中世の屋敷跡と溝

9 バーガ森北斜面遺跡

— 弥生時代の高地性集落 —

バーガ森北斜面遺跡は、高知県吾川郡いの町^{おくな}・是友^{これとも}に所在し、仁淀川の支流、宇治川に沿った標高35～80mの丘陵上に広がる遺跡です。本遺跡は昭和32年（1957）に地元の方が土器を発見し、存在が明らかとなりました。今までに丘陵斜面の7地点について発掘調査が行われ、弥生時代中期末～後期前半の竪穴建物跡や土坑などが遺物とともに発見されたことから、弥生時代の高地性集落の存在が確認されています。

今回の調査は昨年度から、高知西バイパス建設工事に伴い実施しているもので、昨年度は竪穴建物跡や炉跡が見つかり、遺跡範囲がさらに東側に広がっていることが明らかとなりました。今年度は昨年度の西側に当る岩神地点の丘陵部の調査を行ないました。その結果、西側斜面部の畑地で弥生時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡、土坑、柱穴、溝、自然流路（谷川）などが見つかりました。竪穴建物跡は、標高30～35mの地点で3棟確認され、建替えをしているものもみられます。Ⅱ区で見つかった竪穴建物跡は、直径8m前後を測る大型でありバーガ森北斜面遺跡で発見されている中でも最大規模の建物跡です。また、この竪穴建物跡の近くには、炭化した米やドングリが見つかり、それらを貯蔵していたとみられる貯蔵穴もみつかりました。今回の調査成果は、弥生時代中期末頃の生活の様子をより具体的にみることができ、バーガ森北斜面遺跡の弥生時代中期末～後期前半にかけての全体的な集落構造と変遷をみることができました。

（県埋蔵文化財センター 吉成承三）



大型の竪穴建物跡



米やドングリを貯蔵していた土坑

10 試掘・確認調査

おど 尾戸遺跡—江戸時代の侍屋敷跡を確認—

尾戸遺跡は高知城の北側にあり、江ノ口川の両岸に広がる遺跡です。本年度の試掘・確認調査（旧法務局西側の地点）では、江戸時代の侍屋敷跡を確認しました。部分的な調査であるため、遺跡の全貌は明らかにできませんでしたが、屋敷地の境界とみられる溝の一部や、ごみ穴に使用したとみられる土坑を検出しました。



出土した尾戸焼の椀・皿

この他、土坑内や江戸時代の堆積層からは、地元産の土器、肥前の陶磁器、備前焼なども出土しました。また、近隣の尾戸窯で使用された窯道具、尾戸焼の椀、皿、水指など、尾戸窯に関わる遺物が多く出土したことも注目されます。

（高知市教育委員会 浜田恵子）

おおてすじ 追手筋遺跡—小学校の地下に眠る高知城下町—

県教育委員会では、県内各地10ヶ所で公共事業に伴う試掘・確認調査のほか、史跡高知城跡の追手門やぎまべい矢狭間塀の石垣整備に伴う確認調査を実施しました。

このうち、高知市立追手前小学校内で新たに見つかった追手筋遺跡では、校内東端において複数の柱穴が確認されました。その直上には江戸時代の陶磁器や瓦を含み、炭化物や灰が無数に散って部分的に赤く焼けた土が堆積していたことから、元禄11（1698）年又は享保12（1727）年の大火で被災した生活面である



被災した生活面

可能性が考えられます。また校内北東では旧河道又は湿地の中に打ち込まれた杭列、プール北では溝や整地層を確認しました。絵図をみると、校内には御家老の屋敷があったようです。今回は部分的な調査でしたが、追手前小学校内の現地表下1.5m前後には、江戸時代の高知城下町跡が良好に残っていることが明らかとなりました。（県文化財課 米田克彦）

11 出前考古学教室

—本物の遺物を子どもに届ける—

出前考古学教室は今年で14年目になります。本年度までの実施回数は520回、実施校は延べ599校、授業を受けた児童生徒は小学校を中心に約19,000人、見学者等を含めると参加総数は27,000人を超えます。今年は64校（61回）で実施しました。活動内容は考古学の授業、高知県の遺物の展示解説、火起こし体験、^{まがたま}勾玉づくり、土器づくりなどです。授業は発掘の仕方や地域の遺跡を中心にして、それぞれの時代の特色を学習し自分たちの地域に興味や関心をもってもらうような内容にするとともに、学校の歴史学習にも生かせるような工夫をしてきました。展示解説は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の土器や石鏃などを解説して、私たちの祖先の人々の工夫と知恵を考えるような説明を行いました。火起こし体験ではマイギリ式やキリモミ式で生徒自ら火を起こして昔の人々に思いを馳せました。勾玉づくりは毎年一番人気の体験活動です。世界でただ一つの自分の勾玉ができたと喜ぶ生徒の顔は生き生きとしており、私たちに大きなパワーを与えてくれます。

今年の後期は土器づくりも行いました。土器づくりは時間や労力もかかりますが、やりがいのある活動です。土器焼きは児童が一生懸命作った土器が割れてしまう可能性もあるのでためらう児童もいましたが、今回はほとんど割れることもなく大喜びで大成功でした。来年度も試みたい活動です。今後の課題は多くの小中学校の先生に高知の遺跡に興味関心をもってもらい授業に考古学教室を取り入れてほしいということです。また東部地区の学校の参加数が少ないので増やしたいと思っています。来年度も考古学の普及啓発に努めていきますのでご協力をよろしくお願い致します。

（県埋蔵文化財センター 藤野明弘）



出前授業



勾玉づくり

12 昨年度指定された天然記念物（地質）

— 五色ノ浜の横浪メランジュ(土佐市宇佐町竜^{りゅう}) —



現在の日本列島の骨格は約3億年前からの海洋プレートの沈み込みに伴う地層の付加作用により形成されてきたことが1970年代以降、明らかになってきました。土佐市横浪半島の五色ノ浜の海岸は、こうして付加された四万十帯と呼ばれる地層の典型です。海嶺で形成された海洋プレートは、日本列島付近に到達し、沈み込み始めます。海洋プレート上には、玄武岩・石灰岩・チャートなどの地層が順番に堆積。さらに海洋プレートの地層の上に陸側から供給された砂や泥の地層が堆積します。これは、海洋底層序と呼ばれるものです。地層群の一部は、プレートが沈み込む際にこそげ取られ、これが付加体となります。付加体は、海洋プレートの上に堆積した地層と陸側から供給された地層が、複雑に混ざり合い著しく変形したメランジュと呼ばれる地層と比較的変形の少ない砂岩泥岩の互層（整然層）で構成されます。五色ノ浜の横浪メランジュは、このような考え方が世界に先駆けて証明された場所として世界的にも重要です。（平成23年2月7日指定）

— 小鶴津の興津メランジュ及びシュードタキライト（四万十町小鶴津^{こつるつ}） —



五色ノ浜と同様に四万十町小鶴津の海岸には、四万十帯と呼ばれる地層が典型的にみられます。興津メランジュと北側の野々川層とを境する興津断層からは、高速での断層運動により岩石が溶けた証拠とされるシュードタキライトを含む約5000万年前の震源断層（地下深部の震源領域の断層）が発見されました。シュードタキライトは、過去の地震を起こした断層運動の証拠であり、付加体の形成の過程でより長い時間をかけて地表部に露出したもので、プレートの沈み込み帯からのシュードタキライトの発見は世界で初めての事例です。現在の四国沖の南海トラフでは海洋プレート（フィリピン海プレート）が沈み込みを続け、付加体が形成されつつあり、南海地震などの海溝型の巨大地震を発生させてきました。興津メランジュは、南海トラフで繰り返されている巨大地震の発生メカニズムを知る手掛かりになるものでもあり、地震防災上も重要です。（平成23年2月7日指定）（県文化財課 中内 勝）

13 高知県が面積日本一！？

—日本で唯一の5市町連携・重要文化的景観の選定—

文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法第2条第1項第5号）で、そのうち重要文化的景観として選定されているものが、日本に30件あります。高知県では梶原町、津野町、中土佐町、四万十町、四万十市の5市町連携で「四万十川流域の文化的景観」（平成21年2月選定）、中土佐町の「久礼の港と漁師町の景観」（平成23年2月選定）と6件が選定され、件数・選定範囲の面積とも日本一です。また今年度は「四万十川流域の文化的景観」として四万十町で市生原地区、津野町で布施ヶ坂地区と高野・宮谷地区が追加選定されました。

この重要文化的景観の特徴は、人々が生活・生業を通じて自然と関わり合う中で作りだしてきた文化財であること、他の文化財同様、地域の祭りや行事と連携して地域の活性化に利用できること、広範囲にわたる選定が可能なことなどがあげられます。四万十川上流の美しい棚田や茶畑、石積みの広がり、中流域ののどかな田園風景と縄文から続く遺跡の数々、下流域の川と海が見せる雄大さ、そして久礼の酒蔵や久礼港などの歴史的な町並み。各市町それぞれの沈下橋や集落は、その景観の違いを探るのもまた興味深く、これらもきっと、来訪者の心に何かをもたらしてくれることでしょう。

（県文化財課 松田直則、門田雅仁）



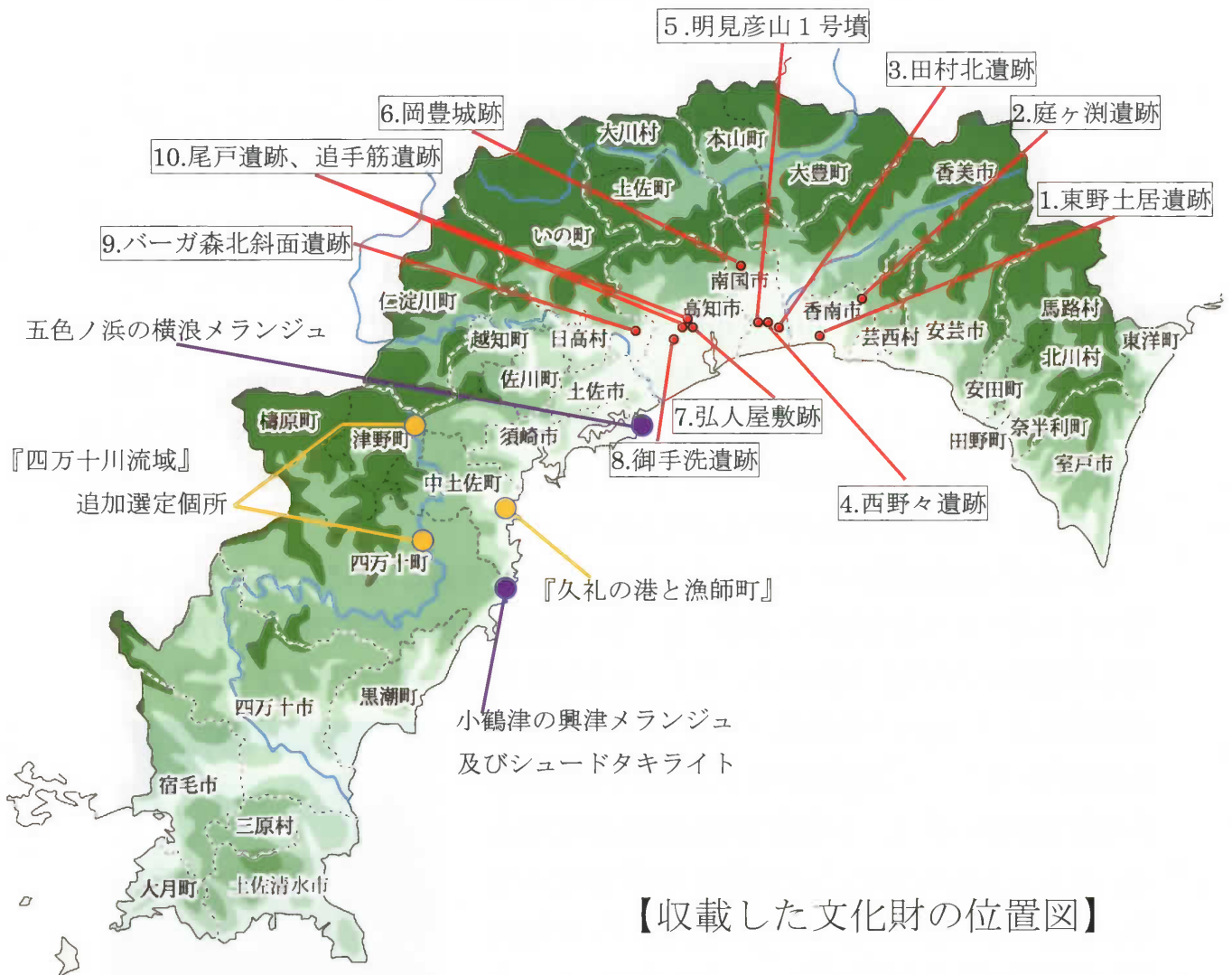
布施ヶ坂の茶畑



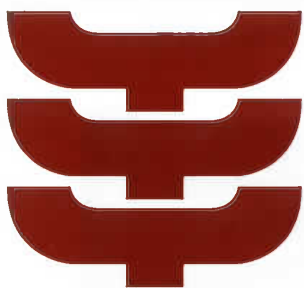
四万十市の沈下橋



市生原の田園風景



【収載した文化財の位置図】



みんなで守ろう文化財

埋文こうち 第25号

平成24年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会文化財課

〒780-8050 高知県高知市丸ノ内1-7-52

印刷 共和印刷株式会社